

# 代名詞における日・琉関係

大 津 不 二 也

## 序 —

印欧語族のロマン諸言語の比較文法、ゲルマン語派諸言語の比較文法、またサンスクリット（梵語）・ギリシャ語・古典アルメニヤ語の比較研究などは、言語の歴史的研究に一大示唆を与えてくれる。

言語の歴史の研究は、年代順に配列された一連の文献資料によってなされるものではない。古い文献資料を使用するのは、これによって言語の状態を見ようとするに過ぎない。

文献資料から学び得るところは、偉大なものがあり、また古代の言語状態について明確な概念を得ることもできる。しかし、この種の研究は、ただある瞬間において、またある事情のもとにおける言語状態を決定し得るだけに過ぎない。もっとも恵まれた場合においても書かれた言語のなかに話された言語の継起的变化が確実に登録されているのを見出すことは望めない。多くの場合、書かれた言語は固定したものであって、その表わす形は数世紀にわたってほとんど変化しないことがあり、また、まったく固定しきらない場合であっても非常に前の時代の形に支配されがちである。さらにまた、書かれた文献資料の示すいろいろな形のなか、そのいずれがそれ以後の言語の歴史に有力であったかを示すものは、比較だけである。しかし、比較は、ただ方向を示すだけであって、積極的実証的証拠を与えてくれるものではない。従って一般に言語の歴史の研究は、言語状態を相互に比較することによってだけ行われる。なんとすれば、文献を作製した当時の人々がその時々語られていた言語の用法を多少の差はあるが完全に写している文献資料が時代的に継続して残されているような特別な場合にも、それらの文献資料の供給する言語事実は、まだ何人の手にも記録されることなく起り過ぎ去った言語的的大事実に比べると、ほとんど問題にならないくらいに重要性の乏しいものであり、もっとも多くの場合まったく無意義に過ぎないものであるからである。また、過去の言語状態を決定するためにはもっと正確にして厳密な文

献学に待たなければならない。そして、比較が完全に成功した場合、これによって共通基語 (langue commune) の再建に到達することができる。〔アントワヌ＝メイエ著、泉井久之助訳「史的言語学に於ける比較の方法」昭和9年、P.1～19参照〕。

ある言語が広い地域にわたって話される時には、言語の変化は地方によって独自の過程を取り易く、特に地方間の交流が少ない場合には個別的変化は著しく、知らず知らずの間に言語の分離(分化)が行われる。しかし、この分離に対しては共通の文化・政治的中心、文学などが大きな力となって対抗する。分離によって生じたすべての方言のなか、文化的・政治的に優秀強力な方言は多くの異なる方言を同化・吸収してその強力な方言は広い範囲に普及し、無限の分離を防いでいる。分離した諸言語は、そのなかで分離以前の時代の記憶を持っている。言語の変化は、その変化が伝えられて行く結果著しくなり、ついにはまったく異なる姿を示すのであるから、歴史的にある言語をたどることができると、分離以前の形を知ることができるし、またこのような歴史的研究の直接の文献資料がまったく無い場合でも、分離した多くの下位諸言語の持っている異なった形における記憶を比較することによって分離以前の共通基語の形を推定して再建することができるだけでなく、分離した諸言語と共通基語形との関係および下位諸言語相互の関係を明かにすることができる。〔高津春繁著「比較言語学」1950年、P.22～33参照〕。

以上の示唆を固く信じ、また沖縄語の古い言語状態を知り得る文献資料に恵まれていない以上、琉球語圏諸島語にこの比較の方法を加えることも、まったくの徒勞ではないと思う。しかし、古い文献資料にも恵まれている印欧語族の場合に成果を挙げたこの方法を適用することの暴挙を恐れる。

第4号以来3回にわたって、動詞・形容詞、語の活用、助動詞について述べる機会を与えられたが、その好意に対して十分に答えられなかったことを恐れている。(なお、助詞・代名詞についての叙述が残されている。)

みずから用いない言語と言う隔りを感じながら、沖縄語に手を付けた。それは、文献資料によっては、日本語の古い言語状態を知ることが少ないので、当時の状態を推定する一助とするため、琉球王国時代の琉球語を調べたいと思ったからである。しかし「おもしろさうし」その他に収録された琉球語は、この資料の内容から限定されたも

のであった。

さいわいに沖繩語圏の諸島語の比較研究と「おもしろさうし」などの研究によって、語の活用、助動詞、助詞では、日本語の古い言語状態と共通のものが多く、日琉共通基語の存在を信じさせるものがある。「おもしろさうし」に収録された古代沖繩語すなわち琉球語は、沖繩語の古い状態を残している宮古や八重山の諸島語から推定するならば、日本語の一方言のような状態に過ぎなかったであろう。しかし、琉球が日本の政治支配から離れ、琉球王国の成立と共に、独自の変化をなし、なお鎌倉・室町時代頃からの日琉の交通の増大と共に、語彙においては相当な変化があり、今日のように a, i, u の三母音となり、活用語の活用は一種に統制されている。これに対して、日本語は、西紀1世紀から5・6世紀頃の中のシナとの地域的あるいは国家的交渉によって音韻体系に変化がもたらされ、語彙においては、古代シナ語や古代シナを介しての梵語、室町時代以来のヨーロッパ文化の影響による外来語の摂取によって、その大半近くがとって代われ、今日の日本語と沖繩語とは、同系語的な姿を呈している。

本論では、沖繩語の代名詞を取り扱う。

引用の書は、次のようなものである。

「琉球館訳語」…伊波普猷氏の比較研究によつて、15世紀初めごろ明の四夷館館員が琉球使節などから採録したものと考えられる。〔伊波普猷著、「南島方言史攷」P.309参照〕。

「語音翻訳」…明の弘治14年春テョウセンへ遣わされた琉球王の使節から、その接待係が採録したもので、16世紀初めの琉球王国の口語を写したものと考えられる。〔伊波普猷著前掲書P.49～125参照〕。

「おもしろさうし」…第1巻1532年、第2巻1613年、第3巻～22巻1623年の結集で、16世紀なかば～17世紀なかばの約500年間の「おもしろ」（神歌）1553首（重複があつて約1150首）を集め、用いられている琉球語は、さらに古いものと考えられるが、内容が限定されているので、収録語彙は限られている。

「簡海類編」「音韻字海」「海篇正宗」についてはまだ一覧の機なく、東条操編「南島方言資料」によつた。「南島八重垣」（山内盛暲著）…明治初年の沖繩語を収録したもの。

大島諸島語は、主として新屋敷幸繁著「奄美大島の方言と土俗」（昭和11年）、東条操編「南島方言資料」（昭和5年）などによつた。

琉球戯曲の資料は、「方言」（昭和9年）連載の伊波普猷筆、「琉球戯曲新辞典」、琉球歌は真境名安興筆「琉球歌詞解釈」（「方言」所載）によつた。

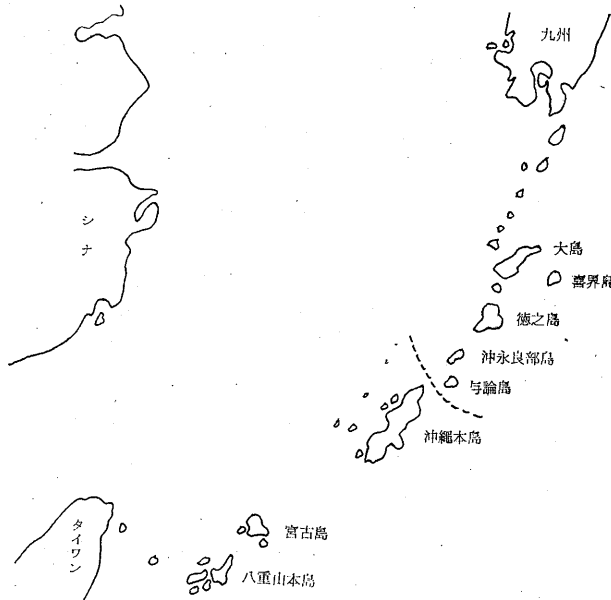
「効胤験集」（一名内裏言葉）…1718年王命によつて集録されたが、当時の口語とはかなり相違していて3代仕えた女官に聞いて作つた「おもしろさうし」の辞書である。16世紀前後の琉球語の姿を推察せしめる。集録当時の口語は、琉球王国が島津民に征服されて相当の年月が経つており、当時の日本語も多く入つて来、この集録の言語とは相当違つたものであつたろう。

宮古島方言は、与儀達敏筆「宮古島方言研究」（「方言」第4巻第10号所載、昭和9年）ならびに東条操編、「南島方言資料」によつた。

八重山諸島語は、宮良当壮著、「八重山語彙」、東条操編前掲書によった。

なお、これらの諸書に負うところ大なることを付記して、謝意を表したい。〔引用書名においては、以下当用漢字の字体によった。〕

### 琉球語圏諸島略図



## 本論 —

### 沖縄語の代名詞

〔引例は、印刷上の事情を考慮して、筆者がローマナイズした。その点不正確であろうが、ご諒察を願う。〕

\*は、沖縄語の音声変化から考えてその前段階と考えられるもの、あるいは実証されない仮定の形式を示す。〕

#### 1 人代名詞

(1) 自称… ang, wa (15世紀初めの「琉球館訳語」)

wan (16世紀初めの「語音翻訳」)

wa, an, a (12世紀頃から16世紀にわたる神歌を結集した「おもろさうし」)

wanu (「篇海類篇」「音韻字海」「海篇正宗」)〔伊波普猷著、「南島方言史攷」  
P 50参照〕

wa, ware, wami, uga, ugacchi, など。(琉球戯曲)

沖繩語彙集「八重垣」には、<わん、我身也。「わみ」の「み」は「ん」に転訛して、「わん」と言う。或は「わん(wanu)」とも言う。>と。「八重垣」の著者山内盛薫氏は、「わん」を「我身(wami)」の転訛のように考えておられるが、前述の「瓦奴(wanu)」があり、また「万葉集」でも「わん」とあることから、日琉共通基語として \*wanu (→wan) を推定できよう。なお、「八重垣」で歌語として wadu (我嗣) が挙げられるが、これは、琉球歌の「わど(wado)」の転訛と考えられ、琉球語の造語法によるもので、「wan(我身)」と同じような複合語と考えられる。

かつて琉球語圏に属していた大島諸島の徳之島 waki, ure; 喜界島 wa; 大島本島 wan; などがある。waki は不明であるが、やはり複合語と考えて差支えないのではなかろうか。ure は、かつて日本の古語で自称に用いられた \*ore の転訛であろう。ore は、今日九州南部、種子島、屋久島、大島諸島の口之永良部島、硫黄島などの南部諸島語で自称として用いられている。従って、uri (←\*ore) の存在は、奈良時代末か平安時代初めかの「おれ」の対称への転用を映しているものではなかろうか。

今日、沖繩諸島では、

本島 wan; 宮古 ba, ban; 八重山石垣 banu (←\*bado)。

奈良時代(8世紀以降)においては、自称に a, are, wa, ware があり、a, wa が古く、これらは助詞「が」を伴って、あるいは助詞がなく複合語を作っている。

<sup>あ</sup>(吾が松原(万葉6)), <sup>あ</sup>(吾が命(万葉3)), <sup>あご</sup>(吾子(万葉19)), <sup>わぎもと</sup>(吾妹子(万葉1)), <sup>わぎみ</sup>(吾君(万葉3)), など

そして、単独では are, ware が普通である。

沖繩でも、a, wa の形も使われるが、単独では wan が有力である。沖繩の an は、wan の w が音声変化で脱落したものと考えられる。

日本語の are, ware に対応する形は、沖繩語では見出されない。

以上のことから考えて、日本語において wa, a, wan などの有力な時代に、沖繩(古くは琉球)は地理的關係・政治的連繫の弱体化から、日本から離れて行ったのであろう。

「八重垣」では、iga shima (我が國), iga dū (我が嗣→我), iga tā, (我等), Ggatā (我等) が記載され、歌語として aya (我が親), wado (我), wadu (我) が用いられている。i は自称として単独に使われることは、あまりないように思う。

(i は、古事記のigaのiと共通であろう。)

自称の複数形 … wasita (140年前の女流歌人恩納なべの歌) wattā (「八重垣」), 宮古 banta, bandā, bagā, ba-ga-dā (八重山), 大島本島 wakya; 沖繩本島 wakya, wachikya; wattā。

以上のように、複数を表わす接尾辞は, ta, tā である。大島本島の接尾辞 kya との関係は明かにし得ないが, これらは日本語の接尾辞 ra と同系とすることはできないように思う。ta, tā, kya は, 沖繩語独自の複数を示す接尾辞であろう。

従って, 日琉共通語時代には, \*wa, \*wau, \*i が用いられ, 単・複を表わす接尾辞 ta, tā は, 分離後独自に発生したものであろう。

## (2) 対 称

ura, urā (「琉球館訳語」), ura (「語音翻訳」); 'yā, ittā (複数), ugatachi (複), nā (単称), nattā, nattā (複数) [「八重垣」]。

琉球語圏に属していた大島諸島では,

徳之島民謡 unuto, ure, wa; 徳之島 iya, 大島本島 ura, nami; 本島の名瀬 nan; 喜界島 da。

(語頭では単母音節を用いない傾向, r→d の相通などから, ura のuが落ち, ra→da と考えられる。)

今日, 沖繩諸島では,

本島 nā (同年輩あるいは少し年上の人に対して), ya (多くは軽い意味で), undzu (御嗣), na do (汝嗣), など。宮古 wa, undzu, wadā。八重山 wanu, wadā, なおuraは, 210年位前まで使われた。〔伊波普猷著「南島方言史攷」P.49参照〕。

日本語では, na, nare が使われ, na が古い形である。na は, 平安時代(8世紀頃)は対称に用いられているが, その以前には自称に用いられたことが知られている。

〔土井忠生編「日本語の歴史」P.56参照〕

沖繩語の nā は, 日本語のnaと同系と考えられる。ura は, 「琉球館訳語」「語音翻訳」などに見え, また西暦1609年に琉球王国から離れて薩摩藩の支配下にあった大島諸島で用いられていることから, 15世紀初め頃より, 用いられていたことが知られる。これは, 伊波普猷氏によると, 日本の方言 ora の転訛したものとしておられる。

〔「南島方言史攷」P.49参照〕

琉球語圏に属した大島諸島の徳之島では 'ya, 喜界島では da の形で今日用い

られているところから考えると、琉球王国時代(1187~1872年)には用いられていたと  
考えねばならないだろう。「おもろさうし」には、その証拠を見出し得ないが、これ  
はこの集の内容上この語が用いられていないのだろう。なお究明の余地はあるが、琉  
球王国時代には *nā*, \**ora* (→今日の*ura*) が用いられていたと考えざるを得ないだろう。

なお、徳之島民謡や宮古では、*wa* が用いられて自称を対称に代用する言語習慣が  
ある。日本語でも *na* が自称に転用せられた痕跡があり、また自称 *ware* が平安時  
代(790年代)には対称に用いられた例が見えることから考えて、日琉共通基語にもこ  
のような傾向があったのではないかと思われる。

### (3) 遠 称

「八重垣」に *ari* が見える程度で、この用例は古くは少ない。*ari* は、音声変化  
から考えて \**are* を予想せしめ、日本語の事物代名詞の遠称 *are* と同系であり、そ  
の転用であろう。

### (4) 不定称

*ta*, *nawo* (「おもろさうし」)

*taru*, *nawo*, *ta* (琉球戯曲)

*ta*, *taru* (琉球歌)

*ta* (大島諸島古歌)

琉球語圏に属していた大島諸島では、喜界島 *tan* の形がある。

沖縄諸島では、

本島 *tā*, *tan*; 本島北部の国頭郡 *san*,

宮古 *tō* (←\**tau*←\**taru*) , *tōta* (複数) , 八重山石垣 *tā*, *taru*。

日本語では、奈良時代(8世紀頃)には *ta*, *tare* が用いられている。沖縄語は、こ  
の *ta* に琉球語独自の接尾辞 *ru* 時に *wo* (未詳) を付けたものであろう。

従って、日琉共通基語として \**ta* を想定せざるを得ないだろう。

以上のように、日琉両語を通じて共通なものは、自称では *wa*, *a*, *wanu*, 対称  
では *na*, \**ora*, 遠称では \**are*, 不定称では *ta* が考えられ、日琉共通語としては  
自称 \**wa*, \**a*, \**wanu*, 対称 \**na*, \**ora*, 遠称 \**are*, 不定称 \**ta* が考えられ、そ

の他の諸形はそれぞれ両語において独自の発生ではないと思われる。

## 2 事物代名詞

### (1) 近 称 … kuri (「語音翻訳」)

kore (琉球戯曲)

kono fitjö (「語音翻訳」, 「この人」の意味)

琉球語圏に属した大島諸島では、本島 kuri, kuri, kuru; 喜界島 huri, kore; 徳之島 kuri, 沖之永良部島 huri。

沖繩では、

本島 furi, kuri; 宮古 kuri, kunu (この), kui, kuritä (複数), kuta (複数); 八重山 kur'i, kut-tä (複数)。

日本語では、ko (記紀・万葉), kore (文語・口語) が用いられている。沖繩語の kuri (→huri) は、o → u, e → i の音声変化を考慮に置くならば、前段階として \*kore があったことは、明かである。また、接尾辞 ri は日本語の接尾辞 re に対応する。

従って、日琉共通基語 \*ko, \*kore の存在を推定せしめる。

### (2) 中 称 … ore (琉球戯曲)

ure (大島本島古歌)

ure (徳之島民謡「朝花」)

琉球語圏に属した大島諸島では、uri, uru が用いられている。(uruは、iとuとの相通と考えられよう。)

沖繩では、本島 uri, 宮古 uri, ui, unu (その), urita (複数), uita (複数), 八重山 uri, ut-tä。

日本語では、so, sore が用いられ、日琉共通基語として \*so, \*sore が推定される。沖繩では、o → u, e → i の音声変化を受けて、\*so → \*su → u あるいは \*sore → \*suri → uri の過程を経て今日に至ったと考えられる。

(3) 遠 称 … これは古い語としては用例を見ないが、琉球語圏に属していた大島諸島では ari, aru が用いられている。



沖繩では、本島 *ari*, 宮古 *kari*, 八重山 *kari*。

日本語では、奈良時代（8世紀頃）には、*ka*, *kare* が用いられている。

従って、日琉共通基語として *\*ka*, *\*kare* が推定される。沖繩語では、*\*kare*→*\*hari*→*ari* の過程を取って、今日に至ったと考えられる。

(4) 不定称 … *nu* (「語音翻訳」)

*no* (「おもろそうし」)

*no* (琉球歌)

*no* (琉球戯曲「大川敵討」)

*nū* (「八重垣」)

*nani* (徳之島民謡)

*nu* (大島民謡)

琉球語圏に属した大島諸島では、*nu* が有力である。

沖繩では、本島 *ziri*, *dziru*; 宮古 *ndzi*, *ndzīnu* (どれの), *ndzītā* (複数); 八重山 *nō*, *nū* (鳩間島), *z'iri* (石垣島), *dzā* (波照間島), *dzur'i* (小浜島), *ndi* (与那島), *nz'i* (黒島), *nz'uru* (新城島), *ndzar'i* (竹富島), など。

以上のように、古い文献資料によると、*no* あるいはその変化形 *nu* あるいは *nū* が有力である。*ziri*, *ndzi*, *dziru*, *z'iri*, *dzā*, *dzur'i*, *ndi*, *nz'i*, *ndzar'i* などは、前に述べたように *\*iDu* に接尾辞 *re* (→*ri*) を付けた形の音声変化したもの、あるいはその縮約されたものであろう。

日本語では、*nani*, *idu* (→*dzu*), *idure* (→*idzure*) (共に文語); *nani*, *dore* (共に口語) がある。

以上のことから考えて、日琉共通基語として *\*idure*, *\*nō* あるいは *\*no* が推定される。しかし、日本語では、*\*nō* あるいは *\*no* に対応する形は見出されないようだ。しかし、日本語における音声現象 ([i] の脱落, [n] と [u] との相通, 相互同化など) を考慮に置くならば、*\*nani*→*\*nan*→*\*nau*→*\*nō* の過程も考えられないではない。

以上のように、人名名詞・事物代名詞には対応があり、それぞれ日琉共通基語を受

継いでいる点が多い。

### 3 場所代名詞

#### (1) 近 称 … koma (「語音翻訳」)

kuma (西暦1527年の下馬碑)

koma (琉球戯曲)

ama kuma (「八重山」)

ko ga ta (女流歌人恩納なべの歌)

kuma (徳之島民謡)

琉球語圏に属していた大島諸島では、徳之島 kuma, 喜界島 huma, 沖之永良部島 mā, 与論島 huma。

今日、沖縄では、本島 huma (北部地方), kuma (南半部), 宮古 kuma, 八重山 kuma, kumatā (複数)。

以上のように、地域的に k-h の対応があるが、これは沖縄語圏諸島語間に存する音韻対応である。従って、16世紀頃は「語音翻訳」の koma があったことが知られる。koma は、日本語の koko と対応するが、これは事物代名詞の近称 ko に沖縄語独自の接尾辞 ma を付けたものと考えられる。[日本語の kocchi は ko に接尾辞 chi を付けたもので、室町時代以後(14世紀以後)のものであろう。]

従って、日・琉共通基語として \*ko が推定され、その後琉球語では独自の接尾辞 ma を付け、koma が生じ、その後音声変化を受け、今日の沖縄語の kuma, huma となったのであろう。

#### (2) 中 称 … uma (徳之島民謡「朝花」。古い時代の資料には中称は見当たらない。)

琉球語圏に属していた大島諸島では、本島 uma, 喜界島 uma, 徳之島 uma, 沖之永良部島 mā (mā は喉頭破裂音が先行して発音される。)

沖縄では、本島 uma, mma, umā, huma; 宮古 uma; 八重山群島の新城島 (俗称なばり) では中称がなく、近称 mō・遠称 kamē を代用する、小浜島 kun, 最南端の波照間島 nā (māの転訛) [「方言」第4巻第10号宮良当壮氏の「八重山語彙の研究」P.78~81参照] uma (宮良当壮著「八重山語彙」P.64参照)。なお、本島の西海岸に近い久米島 kama (遠称の代用), 東海岸の久高島 fuma (←遠称 kuma)。

以上の諸例で知られるように、中称には近称・遠称を代用し、特に近称で代用する  
場合が多い。uma の ma は場所を示す接尾辞と考えられるので、u は日本語の事物  
代名詞の遠称soと同系と考えられる。それは、sono mono に対応するものとし unu  
mumu と言うように、南方諸島語（琉球語圏に属したあるいは今も属している諸島語）では \*so  
→su となり、ついにsが脱落する傾向があるからである。〔方言〕第4巻、第10号の宮良  
当杜氏の研究P.80参照〕

しかしこれについては多少の疑問が残る。前に述べたように、中称が無い場合には、  
近称を代用する傾向が多いのであるから、\*koma→\*kuma→\*huma→uma の過程も  
考えられないことはない。しかし、日本語では soko が用いられているので、日琉  
共通基語としては \*so が考えられ、その後琉球語独自の場所を示す接尾辞 ma を付  
ける形 \*soma が生じ、音声変化や子音脱落を生じ、\*soma→\*suma あるいは \*oma  
→uma の過程を取って今日に至ったものと考えられ、事物代名詞の中称を代用し、  
場所代名詞の中称の独自のものの発生はなかったと思う。

(3) 遠 称 … ama-kuma (「八重垣」,「あそこ・ここ」の意味)

ama (琉球戯曲)「万才敵討」。これは、遠称を人代名詞の遠称に転用している。)

琉球語圏に属した大島諸島では、ama, amā (神之永良部島) が用いられる。  
沖繩では、本島 ama, amā; 宮古kama; 八重山kama, huma (黒島)。

沖繩語においては、地域的に k—h の音韻対応が考えられるので、\*kama→  
\*hama→ama の過程を推定し得る。

従って、ama は日本語の事物代名詞の遠称 ka と同系のものに沖繩語独自の場所  
を示す接尾辞 ma が付いた \*kama から音声変化を受けて、今日に至ったものと考  
えられる。

以上のことから考えて、日琉共通基語 \*ka を推定し、事物代名詞の遠称と同系で、  
特に場所代名詞の遠称として特別な形はなかったであろう。

(4) 不定称 … duma (「麗音翻訳」)

zuma pichu [どこの人 (「おもろさうし」巻16)]

zuma (「混効験集」)

zuma (宮古の古民謡)

琉球語圏に属した大島諸島では、

本島 da, dā; 喜界島 da, 徳之島 dā, 沖之永良部島 dā, 与論島 ida。

沖繩では、

本島 ma, dā (北地域); 宮古 idza, ndza; 八重山 ndzē (新城島), d3ā (波照間島), dzīma (石垣島), dun (西小浜島), ma (黒島)。なお、本島に近い久高島 ma。

諸島語では、地域的に i-n (語頭において) があるので, idza, ida, ndzē は \*iDuma (Dは、地域的によつて口蓋化したりしなかつたりするので、仮にDで表記する。maは、沖縄語独自の場所を表わす接尾辞) を推定できる。duma, dzīma は i が弱って脱落し、さらに縮まって da, dā となったと考えられる。日本語では、不定称 iduko・iduku の idu; doko・dokora の do が注目される。従つて、日琉共通基語としては \*idu が推定され、場所代名詞の不定称には事物代名詞の不定称を代用し、場所代名詞の不定称としての特別な形はなかつたと考えられる。そして、日本語の場所を表わす接尾辞 ko, 沖縄語の場所を表わす接尾辞 ma は、日琉の分離後に生じたものであろう。

以上のように、人代名詞・事物代名詞には日本語との対応があり、それぞれ日琉共通基語を受継いでいる点が多い。しかし、場所代名詞は事物代名詞を転用したことから考へて、日琉共通基語時代には人代名詞・事物代名詞しかなく、場所代名詞は日・琉分離後それぞれ事物代名詞に接尾辞 ko, ma を付けて作られたもので、沖繩においてはその後の音声変化を受けて今日に至つたと考えられる。

## 結 び

前々号の「語の活用」、前号の「助動詞における日琉関係」において、琉球王国の政治・文化圏に属していた大島諸島語、今なおそれに属している沖縄諸島の主な諸島語の比較によつて、また本論における代名詞についての比較によつて、沖縄語の前身である琉球語が日本語と同じような語の活用をなし、また助動詞においても代名詞においても共通のものを多く持ち、日琉共通基語の推定を可能ならしめた。

このように、かつては一つの言語の諸方言のようであつた両者も、分離後は各々政治・文化圏を異にして独自の発達をなし、加えるに日本はシナ文化後にはヨーロッパ

---

文化の摂取によって語彙においては大なる交替・変化をなし、これに対して沖縄は日琉共通基語の伝統を受継ぎながら、琉球王国と言う政治・文化化圏において独自の発達をなし、14世紀末頃からの日・琉交渉（地理的關係からは以前からあつたであろうが、島津氏の支配、明治以後の行政關係など）を通じて分離後の日本語の影響を受けて、今日のような同系語の様相を呈するに至ったのであろう。

#### 付 記

日・琉の分離の時代の推定は、本論の取り扱うところではないが、服部氏は言語年代学的研究によって、両者が分離した年代を今から2000年以上前とすることが困難なことを述べておられる。〔服部四郎著「言語学の方法」参照〕。